

---

# 吹奏楽は何とやら・・・

貂寡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

吹奏楽は何とやう・・・

### 【著者名】

Z4936D

### 【作者名】

貂寧

### 【あらすじ】

僕がチューバという低音楽器を吹き始めたきっかけは、単なる暇人だったからだ。ポスターを見て興味を持ったのはよいけれどもつきり音楽を知らないくて・・・それでも彼女たちは俺のことを見捨てなかつたんだ。

僕がチューバを吹いたのは、中学に入学してすぐの事だった。

何部に入ろうか、どこに行こうかとウロウロしていると廊下にこんなポスターが貼つてあった。

“ 金管楽器、木管楽器、弦楽器やつて見ませんか——  
初心者でも大歓迎！！音痴でもOK！！  
音楽に興味なくても大丈夫です・・・是非見学に！！  
音楽室へレッツゴー——  
部員募集中！！！！！！！！  
吹奏楽部 可奈<sup>かな</sup> & 洋子<sup>ようし</sup>”

なんだか明るい部活動だな——どんな部活なんだろう?  
一度見てみるかな?

そんな軽い気持ちで音楽室を訪れた僕・・・  
なんだか今になつてドアを開けるのが怖くなつてしまつた。  
誰もいなかつたらどうしよう・・・

そんな時、いきなりドアが開いた・・・  
「ガラガラガラ」

そこに立つっていたのは女子だった。

「見学希望の方ですか？それとも即入部希望かな？」

僕は、いきなり現れた女子に度肝を抜かれた。  
美人というほどもないが顔立ちが整っていて、そして何よりそらそら  
らした髪をしていた。

「えっと・・・見学でお願いします。」

そういうい終わる前に彼女は笑顔で音楽室に入るようになつた。  
音楽室は、他の教室より少し広く様々な楽器が置かれていたが部員  
は3人しかいないようだつた。

3人は、入ってきた僕の方を見てにっこりと笑つていた。

一人は、カタツムリのような楽器を持っていて・・・

一人は、黒色の縦笛みたいなものを持っていた。

そして彼女は、というと銀色の横笛のようなものを持ってにっこり  
と笑つていた。

この教室も中には俺しか男子がないという寂しさもあつたが彼女  
の笑みで寂しくなくなつた。

彼女を見ていると手に持つていた楽器の説明と部員の説明をしてく  
れた。

「えっとねーーこの楽器は、フルートって言つんだよ。  
で、あそここのカタツムリを持つているのが可奈・・・夕凪可奈で、  
持つているのがホルンで言つ楽器。

でもう一人が洋子・・・奈華洋子で、手に持つているのがクラリ  
ネット・・・

私のフルートと、クラリネットは木管楽器で、ホルンが金管楽器。  
あつそつそつ、私は部長の稀那まれな優ゆう。君はなんて言つ名前??」

僕の頭は、ぐちゃぐちゃになつた。

カタツムリがホルンで・・・???

フルートが黒い奴だつて???

名前聞かれたんだつた。

「僕は、名嘉魔 尤馬です。」

自分的に尤馬つていう名前は氣に入っている。

「みんな——尤馬君今日から部員だからようしふーー！それでは、  
拍手！！」

「えつ・・・いつから部員になつたんですか？？」

僕は、またも不意をつかれた。この部に入るとは、決めてないのに・  
・

「今さつき・・・だからみんな拍手——」

周りは、拍手で音が遮断されたようになつた。  
拍手が鳴りやんで不意に我に返る。

「先輩・・・いつから僕がこの部に入ることになつたんですか？」

「先輩じゃないよ。同じ1年だよ。ここにいるみんなも・・・  
あと君が名前言つた時から既に、この部の部員になつているのだ  
——ハツハツハ——」

「えつ・・・吹奏楽部のメンバーはここに居る1年生だけなんですか？」

「そう。けど大丈夫、心配」無用」」で楽器にいらつた事がないのは君だけだから。

私たちは、小学校の時から慣れ親しんだ楽器だから。

ところで尤馬君は、何の楽器をやるのかな?「

そういうわけで尤馬君は、何の楽器をやるのかな?「  
そういわれて仕方なくあたりを見渡す。楽器のケースが沢山置いてある。

どれにしようか、近くにあつた四角い箱を開ける。  
それには、ラッパが入っていた。

「おおそれは、トランペットって言つた楽器だよ。」

僕は、ふたを閉じる。

「あの～～簡単な楽器つてありませんか?」

僕は、音楽に興味があつたとしてもピアノとかにしか手を触れたことがない。

こんな本当の楽器みたいなものは生まれてこの方触らなかつた。

「そうだな・・・・意外と肺活量ありそuddだからチューバとか。  
「だめだつてあんな重いの。それよりもコーフォとか・・・・・  
なんだか自分だけ置いて行かれた気分だ。  
どんな楽器でも良いのに。」

「じゃあ、チューバをだしてください。」

僕は、チューバという楽器に触れてみるとした。

大きなケースから出された楽器は、金色に光つていて腰よりちょっとしたぐらいの大きさだった。

「えつと・・・これは、チューバ。はあ出すのに一苦労だつたよ。  
で、これは金管楽器だから可奈ちゃんに教えてもらつて。  
可奈――――ちょっと教えてあげてくれる。」

部長がそういうとホルンを吹いていた夕凪が歩ってきた。

「よろしく。」

彼女は、クールに言つた。

「よろしくお願ひします。」

「じゃあまずマウスピースの練習からだけど・・・  
チュー・バの先に付いている銀色のワイングラスみたいなのが分かる  
かな・・・」

僕は、指示されたように先っちょに付いていた銀色のワイングラス型をしたものを取り外す。

「それそれ、でその後に……こうやって唇につけて吹く。」

〔 〕

何ともいえないような音が夕凪が拭いたマウスピースから奏でる。僕もまねしてやってみる。

結構な音だ。

なんだか唇が自然と振動している。

音の高さは、彼女の方が高い。

この違いは、このマウスピースの大きさによるものだと思う。

「そう。結構うまいじゃん。この調子ならチューバは、楽勝かな?」  
そういうつて今度は、楽器の本体にマウスピースをつけるように言つ。  
チューバは、大きいので椅子に座つて吹く。

「ここはソーラーで座る。」

チユーバは、意外と重量がある。  
細身の俺には、少し重労働かと思われたが慣れたらそうでも無さそうだった。

「マウスピースは、付けたね。じゃあ、今さつき音が出たよつて顔で

を振動させて音を出す。「

【トゥーーー】

夕凪が出した音は、紛れもなく楽器の音だった。  
マウスピースで吹いた時よりも澄んでいて綺麗な音。  
僕がやつても出るのだろうか。

息を吸つて吹いてみる。

【ボウーー】

なんだか気力の無いような音・・・  
こんな音で良いのだろうか。

「尤馬君出たじやん！！！なんかええ感じやない？ねえ可奈。」  
「うん、結構うまいし慣れも早い。もしかしたら・・・」

こんなに褒められると変な笑みが出てしまつ。

「そうですか？じゃあ、僕チューバやります。」

それがチューバと彼女との出会いだった。

チューバを習得するのにそんなに時間はかからなかつた。  
ビーフラットの音から1オクターブ以上も出せるようになったのが  
2ヶ月後だった。

なんだか鼻が高いような気がした。

その頃には、吹奏楽部は11人まで部員が増えていた。

部員の中には僕のような楽器をいらつた事のない男子は、いなかつたが  
たが  
パー カッ ショ ン とい う 打 楽 器 の 所 に 男 子 が い た。  
あとは女子ばかりの部活動だ。  
楽器の名前も覚えた。

奈華と他2名がやつて いるのがクラリネット・・・計3人

夕凪、他1人がやっているのがホルン・・・計2人

トランペットが1人・・・計1人

稀那がやっているフルートは2人・・・計2人

俺チューバ1人

そして大きなバイオリンみたいなコントラバスが1人  
あとはパークッシュョンで2人

だから11人・・・・・・・・

8月には、コンクールがある。

夏休みは、休みと言うより練習時間が方が長い。  
僕は、チューバの音を極めるために頑張っている。  
毎日のロングトーンは、欠かさず。  
基礎の練習・・・・。

そして曲の練習。

僕たちの夏休みは、そうして終わった。

コンクールは、というとまあまあの結果で銀賞。

今年の部員が1年生だけだとは、思えない結果だった。  
来年は、どうなるのかな？

ちなみに一番良いのが金、そして銀、銅と続く。

銀を取ったとき部長ははしゃいでいた。

「いえい。やつたー銀取つたぞー尤馬君やつたぞー！山岡中

の快挙だよ～～」

はいはい。快挙です。

「ところで部長これからどうするんですか？」

「ん？ これから、決まってんじやん。アンコンよアンコン なんかすつごく明るいんですけど・・・」

「アンコンってなんですか？」

「えつと・・・可奈！！可奈～アンコンってなんだっけ・・・」

分からぬで使つてたのかよ。

「それは、アンサンブルコンテスト。少人数で分かれてやる音楽のコンクール。

ちなみにこの前あつたコンクールは全員でやつた・・・。」

「曲はどうするんですか？ あとアンコン何時あるんですか？」

「12月・・・曲は各グループで決める。」

「グループ分けは、どうします？」

「くじ～～～！」

部長が大声ではしゃぎまくる。

そうしてくじ引きをした結果。

2つのグループに分かれた。

- ・クラリネット1人、ホルン2人、コントラバス1人、パークッシヨン1人、計5人の五重奏。

- ・フルート2人、クラリネット2人、トランペット1人、パークッシヨン1人そして僕のチューバで7人の7重奏。

何で僕は、部長と一緒になんだ・・・。

部長はちょっと苦手だった。

ポジティブ命みたいな人だし・・・明るすぎる。

十一月まだまだ時間がある。

夏休み明けと言つこともあり僕はまだ、眠気に襲われていた。

それにしても暇・・・・

今、国語の授業をやつている。

食後の国語は、強烈に眠気を誘つ・・・・。

すみません先生お休みなさい。

寝ていろいろにもう11月。

そんなこんなで色々あって・・・・。

僕は、チュー・バを吹きまくつていた。

時々めんどくさくなつたりしたけど・・・

部長の馬力で何とか今までやつてきた。

野球部とかテニス部は、今の時期寒空の中で体を動かしているが  
僕たちも暖かい環境とはいえない音楽室でグループに分かれて練習  
をしている。

基礎の練習をして・・・・

その後曲の練習をする。

曲は冬にちなんで『そりすべり』

明るくて元気あふれる部長ならではの選曲だ。

そして、無茶な練習を繰り返し・・・・

いつの間にか12月中旬のコンクール前日。

前の日とこう事もあり僕たちは、練習を早めに切り上げ楽器を磨く。

ぴかぴかになつた楽器は、1階に持つて降りる・・・。この作業が僕にとっては苦痛だった。

何にせよ重たいこのチューバを3階から1階に持つて降りるのが腕の疲労になる。

そんな時にポジティブの奴に何か言われると腹が立つ・・・。

「よつ、やつてるね〜〜〜尤馬！〜〜よいよ明日・・・。」

「部長なんですか？今ものすごく忙しいんでけど。部長暇そつで

すね・・・どうせなら手伝つてくださいよ・・・」

「え〜〜〜〜面倒だし・・・重そうだし・・・いいや。」

「そうですか・・・じゃあ邪魔をしないでください。」

「僕は、やつとの事で1階に持つて降りることができた。

腕が痛くてもう死にそうだ。

僕たちは、アンサンブルコンテストに出た。

結果は、2つとも金。なんだか鼻が高い。

練習は、きつかったけど賞をもらつたときの達成感は忘れられない。

僕は、この3年間を吹奏楽に費やしても良いなと思った。

そんなある日、部長が僕を呼び出した。

「部長なんですか？」

声をかけると部長は、なんだか神妙な顔をしていた。

「あのせ・・・・・・・」

いつもと違う、ネガティブ感。なんだか不思議だ。

「はい、なんですか？」

「う〜〜〜んとね。じゃん！！

私たち山岡中吹奏楽部が地域のお祭りに参加する事になりました。

「

なぜ僕にそんなことを言ひつんですか？部員全員に言つてください。僕は、つっこみを入れる？？そして部長の手の中にあつたポスターを見る。

そこには、山岡地区の御輿祭の案内が書いてあり・・・  
「山岡中吹奏楽部の演奏」とプログラムの中に書いてあつた。

誰が勝手に決めたんだ・・・。

「で・・・チユーバ担当の尤馬君には、立つて吹いてもらいたいのよ～～」

「ええ？？僕が立つて吹くんですか？そんなの無理ですよ・・・」

「いや、尤馬君だつたらできる。ちなみに部員全員立つんだから。チユーバは、お世辞といえないと重たいのに。」

それを部長は知つてか知らずか・・・

いや、絶対知つているだろう。

せつかくやる気になつたのに・・・もひ、いやだ！！！  
けど断ることは、できないし。

「仕方ない・・・やります。やれば良いんですね！！！  
やけくそだ～～

「それで良い！・・・よつ男だ尤馬君！・・・」

そういうことで、今僕は立ちながら吹いている・・・。  
あり得ないほど腕に負担がかかっている。

曲は、コンクールの曲とアンコンの曲、そして今はやっている2曲、合計5曲だ。

こんな日曜日にこんなに体力を使つとは、吹奏楽部に入つて一番災厄な行事。

聞いてる人は、高齢者かちつちやい子供。。。

そして、あれから1ヶ月。。。

なんか色々とありすぎて訳が分からなくなつて來た。

卒業式と入学式・・・あと部活動紹介。

今、僕たちは中学2年生。

新しい新入部員を集めるために、僕たちはポスターを作つて貼つた。僕が作つたポスターは、部長と同様に汚い。

貼る場所なんてあるのか？

ちなみに去年ポスターを作つた夕凪たちは。。

本当のポスターと言うほど立派だつた。

夕凪たちはポスター作りの天才だ！！

なんだか時間がだんだんと過ぎていく。

そして三年最後のコンクール。

ステージに上がつた僕たちはライトにてらされ課題曲を演奏する。

頑張つて練習したこの夏休みを思いだす。

楽しかつたことを思いだす。

チユーバやつて良かつたと思つ。

そして曲演奏が終わる。

辺りからは拍手喝采。

もう天にでも昇る気分だ。

最後のコンクールは、見事に金賞。

卒業に花を飾った。

部長はと言つと。

「良くやつたぞーーみんなー本当にありがとう。」

「オツ部長が泣いてやがる。」そう言つたのは、パークの男子が言った。

「オイオイ、泣くんじゃねーよ~」

僕も言う。けれど最後が金で本当に良かった。

「みんなありがとーー」

部長はまだ言い続ける。

そして卒業式前日。

僕は学校に忘れものをしていいかと教室にいた。

すると、部長いや、旧部長の稀那が入ってきた。

「まだ残つてたの？早く帰らないと・・・」彼女は寂しそうに言つてている。

「はい、忘れものをしていいかと。それより部長は。」

「うんつとね、もうこの教室使わないじやんだから見收めかなつて。ところで尤馬は何所の高校に行くの？」

「えつ、俺ですか・・・近くの普通科の高校です。えつと庄補高校です。」

「そつなんだー私と一緒にじゃんー初めて知つたわーーでツ、高校

入つても吹奏楽続けてくれるのかな？」

彼女は、満面の笑みを浮かべて言つ。どうしたらいいのだろう。高校入つてからと決めていたから・・・。

今決められるはずもない。

「まだ決めていません。すみません。ところで部長は？」

「その部長ってやめてくれないかな？そりやあもちろん・・・」

「そうですか？」

こんな会話で僕たちは卒業前の会話を終えた。

なんだか色々ありすぎて思い出が大変なことになつていて、だけどこの3年間、とっても楽しかったです部長。

僕は、その後高校に入学し、部長とも再会した。

吹奏楽もただいま続行中で、いつもで続ければいいのやら・・・

ちなみに部長は今でも部長である。

空は、オレンジに色づいているけれど

僕の心は部長に振り回されて淡いブルーになつていて。

高校、大学。どんな進路に進もつか、音楽をつづけようか今不安要素になりつつある。

みなさんは、音楽の授業が嫌いだつた頃もあったかもしれません。なんだか合奏をすると良い気分になりますよ。

今でも遅くないと思います。

小学校で使つたり「オーディーでも教室にありそつたオルガンでも何でも良いから

もう一度使ってみてください。

絶対に人生が楽しくなっていくと思います。

(後書き)

私が音楽に田覚めたのは、小学校の頃だったと思います。なんだか色々とあって楽しい日々だったと思い出ではなっています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4936d/>

---

吹奏楽は何とやら・・・

2010年11月24日09時15分発行